



#35

# シンデレラは突然に……

著:藍澤たすく

イラスト:かもめ遊羽

俺の名前は木村恭平。  
おれ

都内の男子校に通うごく平凡な高校生。

——のはずだった。

ほんの10分ほど前までは。

「うそ、だろ……」

俺は目の前の姿見をもう一度凝視する。

何度も見てもそこに映っているのは俺ではなく、穂積さゆりその人だった。

穂積さゆり——通称さゆりん——は全国に100万人規模のファンクラブを持つ国民的アイドルだ。いつも元気でニコニコな笑顔がトレードマークの14歳。今もつとも注目されている本格派の歌い手でもある。

そのさゆりんに、自分がなつていてる……?!

俺は混乱する頭を必死に整理しようとした。

だが考えれば考えるほど頭の中がこんがらがつてくる。

姿見の中のさゆりんも戸惑つた顔で心配そうにこちらを見つめていた。

——可愛いなあ。

俺は思わず、ため息をついた。

なぜならご多分に洩れず、俺も熱心な「さゆりすと」だったからだ。

さゆりんのCDは勿論、コンサートにもすべて足を運んでいるし、写真集だって全部持つてある。直筆サイン入りのポスターは俺の一生の宝物だ。ちなみにファンクラブ会員ナンバーは1678045な。

俺は深呼吸をして目の前の姿見をもう一度見つめた。

何度も見てもそこに映っているのはさゆりんそのものだ。

にこつ。

ちよつと微笑んでみる。  
ほほえ

「あああああああ、さゆりんが俺に微笑みかけてくれてるうううううう——」

あまりの感激に俺は思わずその場になへなど座り込む。

舞台衣装のひらひらしたスカートが空気を孕んでふわりと花のようふくらんだ。  
ほら

俺は思わず紅くなつて目を逸らす。

同時に鏡の中のさゆりんも恥ずかしそうに目を逸らした。

そうか。そうだ、これは夢なんだ。

熱心な「さゆりすと」である俺に神様が見せてくれた、ほんのつかの間の「ご褒美なんだ。  
「ご褒美なら……ちらっとくらい見ても……いいよな……」  
あよまつらうつづく、いつまでも見つめたい。

「さゆり！ さるんどうしよ？ 開けるつよ！」

「は、はひ!?」

突然ドアが激しくノックされたあと、勢いよく開けられた。そこに居たのはタイトスカート姿の赤い眼鏡の女性だつた。

見るからに気の強そうな、キヤリアウーマンタイプの印象を受ける。

さゆりんのマネージャーさんだらうか？

あと10分でコンサート本番なんだから！  
早く来る！

俺はその女性に手を引かれ、訳も判らずそのまま廊下ろうかを走らされる。コンサートつて……。

1

記憶がフラツシユバツクする。

ほんの10分前、俺は入場の列に並んでいた。

それはもちろん「センセーショナルシンデ

1ヶ月も前からずつと楽しみにしていたのだ

そんな俺が今はぎゅりんで  
しかもそのエンサート  
無理ごつて三つとも  
ごつて俺は

も無理がつてそんなの！たかって俺  
言いかけたところで大音量の曲が聴<sup>き</sup>こえて

ハニカム「Heart to Heart」のハニカム——。

さゆりんのコンサート1曲目の定番で、俺がさゆりんの曲の中でも一番好きなやつだ。それを聴いた瞬間、そのリズムこのせうれるようこ、俺の鼓動が速くなつていいく。

体温が上がり、頭が芯からぼ一つとして、熱い熱い高揚感が押し寄せてくる。そう、いつまでも浸つていてみたいような、心地よい高揚感が……。

さ、いつてらっしゃい！」  
マネージャーと思しき女性に肩をぽん、と押し出された俺は何のためらいもなく、自然に舞



やりきつた——。

「すごいわ、さゆり！ どうしたの？！ 今日はまるで別人みたいだつたわよ！！ 素晴らしいわ！！」

マネージャーさんが興奮した様子で俺にミネラルウォーターを差し出してくる。

「えへへへ……」

3万人のファンの前で、俺は完璧に歌い、踊り、2時間近いパフォーマンスをこなしていた。

当然だ。

さゆりんの曲で俺が知らない曲なんてないし、振り付けだつて完璧に覚えている。

自分で言うのもなんだが、これまでのさゆりんのコンサートの中でも、一番盛り上がりしているのではないだろうか。

……「さゆりん」の、っていうか「俺」の、なんだけど……。

「よかつたわ。その様子だと、引退のこと考え直してくれたみたいね」「え？」

マネージャーさんが穏やかな笑みを浮かべている。  
それはどこかほつとしたような表情でもあつた。

……引退？ さゆりんが？ まさか……。

「さ、アンコールよ。最後まで気を抜かないでね！」

「はい……」

俺は欣然としないまま、小さく頷いて舞台に戻った。

大歓声がまた俺を熱狂的に迎えてくれる。

引退つて……。

アンコールの曲のイントロが流れてくる。

瞬間、総毛立つた。

「——」

俺の知らない曲……？

新曲？ アンコールで？ そんな馬鹿な！？ それとも単に俺が知らないだけ……？  
いやいやいや、さゆりんのことで俺が知らないことなんて何ひとつないはずだ！

だったらこれは一体……。

助けを求めて舞台袖を見ると、マネージャーさんは携帯を持って何やら嬉しそうな顔で話しかんでいた。この危機的な状況に気づいた様子はない。

ぶたそで

(ど、どうしよう……このままじゃ……)

おろおろとする俺の視界にある物が突然飛び込んできた。

(——「俺」だ!)

それは、今まさに会場をあとにして帰ろうとしている俺——木村恭平の姿だった。

「ま、待つて!!」

俺は矢<sup>や</sup>も盾<sup>たて</sup>もあらず舞台を飛び降り、出口に向かってセンターロードを走り出した。

「さゆり!?

背後でマネージャーさんが驚く声<sup>おどろ</sup>が聞こえる。

ファンはこれも演出の一部と勘違いしたのか、熱狂したまま、走り去る俺の姿を見送つている。

そして目の前の「俺」はバタンとドアを閉めてそのまま会場の外に出ていってしまった……。

◆  
「待つてくれ!」

どこをどう走つてきたか判らない。

ここがどこなのかさえも判らない。

しかし俺はようやく「俺」に追いつくことができた。

「はあ、はあ……ねえ、キミ……『さゆりん』だろ?」

切れる息の下から俺は目の前の「俺」に問いかける。

「俺」——木村恭平は静かに頷<sup>うな</sup>いた。

それと同時に「俺」の姿に、さゆりんの姿が二重写しになる。

「お願い……このままあたしを行かせて……」

さゆりんが切なげな表情で俺に話しかけてくる。

「行かせてつてどこに?」

「どこか遠く……誰もあたしを知らない所へ……」

「なんでそんなこと……」

そこまで言つて俺の脳裏<sup>のうり</sup>に先ほどの言葉<sup>よみがえ</sup>が甦<sup>よみがえ</sup>つた。

——よかつたわ。その様子だと、引退のこと考え直してくれたみたいね——

「引退……するの……?」

気がつくと俺は少し責めるような調子で問いかけていた。

「俺、大好きなのに……さゆりんのこと……どつてもどつても大好きなのに……どうして引退なんか!!」

感情が昂ぶり、思わず叫んでしまう。

「……誰もあたしのことなんか見てないもの……」

「え?」

「みんなが見ているのは、ただの偶像アイドルで、ただの虚像アイドル……本当のあたしのことなんて誰一人見てくれてないもの!」

さゆりんの叫びに、俺はハッとして体を強ばらせた。

「いつも元気になんてできないよ! いつもニコニコなんてできないよ! あたし……あたし、そんな強くないもの! そんなに強く、歌い続けられないもの!」

振り絞るような叫びに、俺はどうすることもできず、ただただ立ち尽くしてさゆりんを見つめるだけだった。

俺はさゆりんのことなら何でも知っていると思つていた。  
知らないことなんてないと思つていた。

でも違つた。

一番大切なことを——さゆりんが、ただの女の子で、その女の子が一人、孤独に苦しんでるつてことを——何ひとつ判つていなかつた。

言葉を失つた俺にさゆりんが続ける。

「それに今日のあなたの方がよっぽど『さゆりん』だつたわ……ステージを見ていて本当にそう思つた……あなたは、みんなの求める『さゆりん』そのものだつた……あたしなんて必要ない……」

「さゆりん……」

彼女の言葉に、俺はとどめを刺された気分だつた。

もう、どうしていいのか判らなくなる。

ただ拳をぎゅっと握つて、唇くちびるを強く噛むばかりだつた。

「じゃ、あたし行くね……。ばいばい、『さゆりん』」

「——」

俺の目の前からさゆりんが消えようとしている。

そして俺は何もできない。

声をかけることも、引き留めることも、なにも——。  
俺は、無力だ——。

「……手をのばす……」

「えへ。」

「その先に、ある……へ。」

さゆりんが驚いて足を止める。

俺は無意識のうちに「Heart to Heart」を歌い始めていた。

「輝きをつかむまでへ、あからめないでへ、」

「…………」

心を込めて、俺は歌う。歌い続ける。

「キミはひとりじゃないへ。」

「…………」

さゆりんがハッとして息を呑む気配が伝わってきた。

俺はただただ、無心で歌い続ける。

「ずっとそばにいるへ。」

「…………だから、あきらめないで。」

不意に俺の声とさゆりんの声が重なった。

見ると目の前のさゆりんは涙ぐんでいた。

「…………ただ素直に、Heart to Heart へ、Heart Two Heart へ。」

歌う彼女の瞳から、ぽろりと大きな涙の粒が零れた。

瞬間、会場中の観衆の熱狂が最高潮に達した。

アンコールに「Heart to Heart」が来るのは初めてだ。

俺も他の「さゆりすと」達同様、興奮していた。熱狂していた。

そして必死にサイリウムを振りながら、ステージのさゆりんにエールを送った。

それに応えるようにさゆりんは笑顔にパワフルに「Heart to Heart」を歌い上げる。心の底まで響くような、とてもとても澄んだ歌声だった。

「今日はみんな、本当にありがとへ——」

「Heart to Heart」を歌い終わつたさゆりんは大きく手を振つて舞台袖に向かつて立く。

俺はあまりの充足感に力が抜け、そのままパイプ椅子の上にへたり込んだ。

今日のステージのさゆりんは、いつも以上に輝いて見えた。

そしていつも以上に身近に感じられた。

そう、まるでさゆりんと「一心同体」になつたかのような……。

そんな心地良い高揚感に、俺はゆつたりと浸り続けたのだった。

おしまい